

日本の労働市場における仕事の構成

——” ジョブの二極化” は起こっているか？——

東京大学大学院 鈴木恭子

1 目的

日本において、正規／非正規雇用間格差に代表される「労働市場の二極化」が関心を集めている。これまで二極化を論じる多くの研究は、「賃金」に焦点をあててその水準の二極化がどのような要因によって説明されるかを論じてきた。しかし、ある人がある仕事をして賃金を受け取っているとき、「それがどのような仕事か（ジョブ）」と、「その仕事にどのような価格がつけられているか（賃金）」は区別しうる論点である。賃金の二極化が生じていることは多くの研究によって実証されているが、その背後には” ジョブの二極化” も生じているのだろうか（神林 2017）？さらにいえば、ジョブの構成の変化と、賃金分布の変化は、対応しているのだろうか？

2 方法

本稿では、就業構造基本調査を用いて、日本の労働市場におけるジョブの構成を明らかにする。ここで” ジョブ” とは、労働市場において一人の労働者が担う仕事を指しており、「雇用機会」とよばれるものに相当する。問題は、その質をどのように計測できるか、という点である（神林 2017）。

Autor, Levy & Murane (2003)は、職業を「繰り返しの有無」と「分析的か否か」という2つの軸で4つのカテゴリーに分類する枠組みを示した。その枠組みをふまえて Ikenaga & Kambayashi (2016)は産業・職業の単位で5つのタスクから構成される仕事の質を計測し、日本の労働市場におけるシェアの変化を論じている(川口 2016)。労働市場の変化をタスクのレベルに分解して捉えるアプローチは、技術革新等の影響を受けて生じる変化をよりきめ細やかに捉えることができるという利点がある。一方で社会学的な視点にたつと、タスクのレベルで生じている変化が職場での業務設計や労務管理を通じて、どのような「ジョブ＝雇用機会」へ構成されるのかという点も、日本の労働市場における特徴を把握するうえで重要である。

本稿では、「産業」「職業」「企業規模」「職位」等の変数を用いて、労働市場におけるジョブの構成・分布を計測することを試みる。そして Autor, Levy and Murane (2003)が提起した「中間的な質のジョブが失われ二極化が進んだ」という傾向が、日本においても該当するか検討する。

3 結果

分析の結果、アメリカでみられた「中間的な質のジョブが失われ二極化が進む」という特徴は、日本では明確には観察されないことが予想される。このことは、タスクの構成に変化があつたにもかかわらずジョブのレベルではその変化を緩和する力が働いていたこと、またジョブの構成自体は大きく変化しなかったにもかかわらず賃金分布の二極化が進んだという点に、日本の労働市場の特徴があつたことを示唆している。

文献

Autor, D. H., Levy, F., & Murnane, R. J. (2003). The skill content of recent technological change: An empirical exploration. *The Quarterly Journal of Economics*, 118(4), 1279-1333.

Ikenaga, T., & Kambayashi, R. (2016). Task polarization in the Japanese labor market: Evidence of a Long - Term trend. *Industrial Relations: A Journal of Economy and Society*, 55(2), 267-293.

川口大司, 2017, 『日本の労働市場：経済学者の視点』 有斐閣

神林龍, 2017, 『正規の世界・非正規の世界：現代日本労働経済学の基本問題』 慶応義塾大学出版会.